

おおともやすひろ
大友康博

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 373 号
学位授与年月日	平成23年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	都市空間の再編をめぐる「脱場所化と再場所化」
論文審査委員	(主査) 教授 吉原直樹 教授 正村俊之 教授 鈴木岩弓 准教授 永井彰 准教授 下夷美幸

論文内容の要旨

序章

高度成長期に生産された建造環境が耐用年限を迎えつつあり、都市空間は再編を余儀なくされている。再編は資本の論理に頼らざるを得ないのか。と同時に、再編に乗じて、さまざまな人びとが、新たなプラットフォームをしたたかにねじ込んでいく動きも芽生えている。これを「脱場所化と再場所化」というキーワードで捉え、その作動原理を探り当てられれば、都市空間の再編を“希望”というチャンスにつなげられるのではないか。一人ひとりが自由に行動でき、つながりあえる場が散りばめられ、そこからクリエイティブな都市文化が創造されていくような都市空間をつくれまいだろうか。本論文は、このような問いをテーマとしている。

このような問いに対し、従来の近代都市計画システムは対応しきれない。代案の構想が必要である。しかし、どんなプランニング思考法にも隠れた前提条件が含まれているものである。いったんはあらゆるプランニング思考法を相対化することが必要である。そのため、本研究では計画理念を分析できる道具の開発を試みたくて、現場に適用できる実践的な代案を構想していく。

本論に入る前に用語を整理しておこう。とくに空間の「均質化と差異化」と「脱場所化と再場所化」という二組の対語が重要である。前者は次章で先行研究の蓄積にふれるとして、後者を説明しておこう。「脱場所化」とは、テーマや時間の限定を前提に、ネットワークがつながりあっていく過程として捉えられる。これは近代的な主権が構築し強化した境界線を解消していくことを意味している。そしてそこにもう一度、戦略的に有界空間を再構築していくことが「再場所化」である。「再場所化」は、水平な対

話の舞台でありその産物でもある、ネットワークの結節点としての「場所」を再構築していく過程である。

第一章 空間の均質化と差異化—近代化過程における空間の問題構制—

導入部となる本章では、近代化過程における空間の「均質化と差異化」はなぜ問題なのかを明らかにするとともに、次章以降の分析の土台となる視座をアンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』(Lefebvre, H. 1974=2000) に依拠して整理する。

ルフェーヴル(1974=2000) および原広司([1975] 2007)によれば、空間の「均質化」とは、近代社会制度が空間を操作できるよう、差異を一旦清算する過程であり、「差異化」とは、近代社会制度にふさわしい空間分割を行なう過程である。そして「均質化」と「差異化」は一連の過程であり、資本の論理が主たる駆動力となっている。このような空間の社会的生産過程を分析するさい、ルフェーヴルは「空間的实践」、「空間の表象」、「表象の空間」から構成される三つの契機間の運動とみる視座を提示する。そして、この視座が『空間の生産』の枢要な論点として理解され、デヴィッド・ハーヴェイをはじめとする以後の社会空間論に受け継がれてきた。

ここから本研究が取り組む二つの課題が浮かび上がる。一つは分析道具についてである。ルフェーヴルによる三元弁証法は、ハーヴェイらの理論研究の基礎へと浸透していった一方で、そのままフィールドレベルの調査研究へ適用しようとするとう問題が生じやすい。たとえば国家・経済に対抗する日常生活というような、伝統的な二項対立図式への単純な当てはめに陥りやすいのである。せっかくの三元弁証法を二元化してはならない。そこでルフェーヴルの分析道具を経験的研究にも適合するよう作り直しながら、彼の視座の有効性を再主張していく必要があるだろう。

もう一つの課題は研究対象についてである。「均質化と差異化」にともなう問題は既にかなり明らかにされてきたと言えようが、それに対するオルタナティブな空間の社会的生産過程「脱場所化と再場所化」の基本原則と具体的な実践技法については、よりいっそうの解明と開拓が待たれているのである。二つ目の課題は第三章以降で検討する。

第二章 村落における空間の社会的生産過程—ルフェーヴル『空間の生産』の実証—

第二章では一つ目の課題、すなわちルフェーヴルの三契機間弁証法という分析道具の洗練にアプローチする。

村落社会の空間秩序は一般に思われているほど安定的・固定的なものではない。移動や分家、地域コミュニティ施策が盛んに行なわれ、そのたびに空間秩序が再編され続ける。村落はそうしたさまざまな空間秩序の再編と社会との関係をシンプルに観察できる格好のフィールドである。ルフェーヴルの三つの契機をうまく使ってこのプロセスを辿り、空間秩序が生成される仕組みと営力の解明に迫ることができれば、彼の視座が経験的レベルの研究においても効力を発揮できるのではないかと。

対象フィールドは、北上山地の小盆地に広がる一村多集落型村落の宮城県志津川町(現・南三陸町)入谷地区である。この地区では、4つの祭礼組織、3つの小学校区、10の行政区、9つの生涯教育系組織、15の契約講をはじめ、いくつもの地縁組織とその空間的枠組みが幾重にも層をなす(1994年調査当時)。

調査の結果、上位権力または自然地形によって境界付けられた領域の規範化が起動力となって合理的な空間秩序が生産されると同時に、血縁即地縁的な同族集団の越境が起動力となって、多様な「生きられた空間」が生産されていく過程が観察され、混然と重なりあっていく姿をスケッチできた。そして、この二つのプロセスは対極的な性格の諸空間を生産するにもかかわらず、ルフェーヴルの三つの契機を

用いてみれば、同じようなメカニズムで説明されうるのである。

第三章 脱場所化と再場所化—ルフェーヴル『空間の生産』の現代的意義—

ここからは、二つ目の課題として「均質化と差異化」の代案を構想していくことに取り組む。本章では、「空間の生産」の現場である都市・建築計画に着目しながら、現代都市における「脱場所化と再場所化」とは何かを探る。

「脱場所化」は、透明で存在感が薄い、軽快かつ開放的な建築として都市景観に現われた。都市空間の均質化や権力者の威信の誇示に加担してきた設計者の権力性を批判し、明快な代案を示したものと言える。社会をどう区分し、それに合わせて領域をいかに編成するのかを決めるのは、管理者でも設計者でもない。時と場合に委ねるのである。

「再場所化」は、市民参加型の都市計画やコンピューターによる自動設計といったかたちで登場した。社会制度に応じて空間を切り分けてきた設計者の恣意性に対する代案を示したものと言える。都市計画や建築設計をひとつのコミュニケーション・システムとみなし、その中に設計者自身を落としこむことによって、設計者は自らデザインした空間形態が都市生活を規定してしまう恣意性から逃れようとした。

このような「脱場所化と再場所化」が先駆的に設計され、その特徴が顕著に観察できる空間が、1995年から2001年にかけて設計・施工された公共施設「せんだいメディアテーク」である。この実験的な空間設計の核心は、①従来ホワイトカラー層が排他的に領有してきた均質空間の形式—すなわち領域編成の自由—をすべての人に開いたこと（脱場所化）。②異質な者たちのさまざまな行動が交差するという、非均質な社会空間を可視化したこと（脱場所化）。③多様な専門家のコミュニケーションをとおして領域が編成されていったこと（再場所化）。以上3点に整理できる。

では、「脱場所化と再場所化」は「均質化と差異化」とどのような関係にあるのか。近代社会制度を空間的に固定する「均質化と差異化」の過程（第一章）と、開かれた場所を生成する「脱場所化と再場所化」の過程（本章）は、その前提も帰結も正反対であるが、対をなす平行な過程と捉えられる。

「脱場所化と再場所化」を以上のように捉えたとき、ルフェーヴルによる用語との相同性はいかなるものか。ルフェーヴルは空間の均質化と差異化を「抽象空間」と呼んで批判し、代案として「具体的空間」を対置している。ルフェーヴルは「具体的空間」をわずかしか説明しないが、しなやかさ、移動性、状況、交流といったキーワードを用いる。ここから読めることは、人びとに状況に応じた領域編成の自由を与えることで流動的な社会を築こうとするというものである。ルフェーヴルがいう「具体的空間」は、本研究の主たるテーマ「脱場所化と再場所化」とよく似ているのである。

第四章 都市・建築計画の展開と「空間・時間・社会」

—現代都市空間の理解・設計・管理に向けた分析枠組みの構築—

本章では、前章の分析枠組みを詳しく掘り下げる¹。都市・建築デザインにおける均質空間の問題構制を扱う研究は数多く蓄積されているが、多様な「非均質な空間」に対しては、十分な体系的整理がなされてきたとは言いがたい。空間と社会という二元に、時間をあわせて三元化することで、多様な計画思想の基礎を捉えうる分析枠組みを創案する。

1 前章では主として時系列的に検討したのに対し、本章ではさまざまな価値観のもとでの都市・建築デザインが共時的に生じるときの“組み合わせ”の問題に焦点を当てたものであり、二つの章で用いる用語はそれぞれ一対一の対応関係にある。

そもそも計画や設計とは、課題解決もしくは目標への接近をめざして何らかの対象を操作する行為である。人間社会のもっとも包括的な解釈のコンテキストを空間・時間・社会的存在（Soja, E. W. 1989=2003）とみなし、存在と認識のレベルを分けて考えれば、計画・設計行為は以下のように整理されよう²。空間・時間・社会は、それぞれ認識されうるか否かをこえて存在のレベルで無限に広がっているとみなせば、計画・設計行為が何らかの操作を働きかけるときに、認識のレベルにおいて空間・時間・社会のいずれかの操作対象範囲が画定される。そして、計画・設計行為が試みようとする課題解決または目標への接近とは、認識のレベルにある諸限定を解き放ち、限定のない存在のレベルにいったん返す行為である。こう考えれば、あらゆる計画・設計行為が、空間・時間・社会のいずれか一元における操作対象範囲を画定（限定、切断）したうえで、他の一元の開放（連続）を目指し、同時に残る一元を保留する、といった基本原理の組み合わせで構成されるとみなせる。

こうして、あらゆる都市・建築デザインを空間・時間・社会の連続（開放）と切断（限定）に着目した六つの理念の組み合わせ方の問題として捉えると、あらゆる計画・設計思想を相対化し、盲点と可能性を確認できるようになる。つまり、計画・設計行為によって限定された次元には隠れた前提条件が潜んでいること、そして開放された次元にはデザイナーの想定を超えた可能性が広がっていることを確認できるのである。

また、この六理念図式によって、都市空間の再編をめぐるさまざまな論争の根本要因がみえてくる。たとえば、仙台市では青葉山公園整備基本計画の見直しにあたって、城跡としての歴史継承を重視する論者と、都市と公園の融合を重視する論者のあいだで意見が対立したが、これは空間・時間・社会の三元において連続と限定が衝突したことによるものであると捉えられる。

第五章 小さなまちづくり活動の連鎖と再場所化

—山形県上山市における城下町・宿場町・温泉町の協働と再生—

近年の「まちづくり」では、地域に住まうさまざまな主体がともに力を合わせることで、オンリーワナな場所を作り上げようとする試みがなされている。この難しい課題に現在進行形で取り組んでいる事例を通じ、都市再編の基本原則として、資本の論理による「差異化」ではない、協働の論理による「再場所化」の可能性を探る。とくに、小さい空間における小さい組織によるスピーディな活動の連鎖によって、まちが再生していく実践技法モデルを探る。

山形県上山市の中心市街地では、城下町、温泉町、宿場町という三層の基層文化が混じり合い、さまざまな主体が交差しながらまちづくり活動が行なわれている。ここでは、さまざまな自主サークルや個人が担う、身の丈の小さな活動の影響力が次なる活動の創造を誘発していく様子を見ることができている。

上山城下の武家屋敷にルーツをもつ4軒並んだ民家が、庭園を一般に開放した。これにあわせ、市が2004年度に武家屋敷通りを美装化すると、徐々に観光客が武家屋敷通りを歩くようになった。すると、地元の建築関係者たちが周辺のプロック塀を黒板で覆う自主活動をはじめた。ある女性団体は休み処を手作りし、散策者に呈茶サービスをはじめた。波及効果は広がり、近くには地産地消の飲食店、工房兼茶房、私設ギャラリーが開設された。そして近隣居住者やボランティアによる清掃・維持活動や、近隣旅館による散策者の送客といった取り組みも誘発されていった。さらに、まちづくり活動の機運は十日町通りの商業者にも飛び火する。2008年、商店街の若手グループは、東北芸術工科大学と連携した「十

2 以下の着想は、ニクラス・ルーマン（1995=2003）、エドワード・W・ソジャ（1989=2003, 1996=2005）から得たものであり、小島孜（1999）の視角と共通する。

日町ストリートギャラリー」や地域密着型の商業祭、観光客への歴史案内などを企画・実行している。同大学とのかかわりはその後、空き店舗を再生したギャラリーの開設や、若い工芸作家の出店などにつながっている。このほかにも、さまざまなテーマ別市民団体やコーディネーターたちが、街並み景観や映画ロケ地の活用、特産品開発などのさまざまなまちづくり活動に力を注いでいる。

上山市中心市街地における、さまざまな業界団体や市民活動が細分化されたままの状況は、活動の分断というより流動的に動けるメリットとなり、それぞれの専門性を活かした協働となって効果を生んでいると思われる。また、中心市街地が比較的狭いことが、相互理解や相互協力を容易にする格好の舞台となっている。小さい空間改変には、小さな行動からでも参加しやすく成果が見えるのも早い。小さなスピーディな取り組みが、狭い空間で同時多発的に発生すれば、さまざまな行動に相互に影響し、結果として協働の論理が働くのではないだろうか。

第六章 都心商業・業務地区の多元的協働管理

—多様な企業連合による「エリアマネジメント」の課題と可能性—

大都市における都心商業・業務地区の建造環境は、経済構造の転換と物理的な老朽化にともなって更新時期を迎えている。このような都市空間の再編期にもっとも重要となる論点は、資本の論理を場所の論理で統制するローカル・ガバナンスの検討であろう。つまり、どのような地域管理の仕組みを築けば、都市の経済活力をいたずらに殺ぐことなく、かといって特定企業が過度に利益を吸い上げるのでもなく、かつ生活者が快適に暮らせる建造環境を導き、芽生えつつある小さなまちづくり活動を連鎖させていけるのか、といった問題である。そこで近年、「エリアマネジメント」と称される、企業や団体、市民、行政それぞれの長所と主体性を引き出しながら多元的協働管理を仕掛けていく新しい動きが注目されている³。本章では仙台市の青葉通における事例をとおして、前章のように地域のコミュニティやパーソナルネットワークに頼ることができない、大都市都心ならではの多元的協働管理の実現に向けた初動期の課題を探る。

青葉通はケヤキ並木の緑量感が特徴のビジネス街である。近年の街並みの変化と市営地下鉄東西線開業への対応などを契機に、2008年、仙台市都市景観課の呼びかけによって、地域住民代表者、沿道企業・団体などで構成される「青葉通街並みづくり勉強会」が発足した。この会では三つの課題に直面し、次のような取り組みをみせている。第一に、住民、企業、行政の間にある「壁」をいかに越えるのか。勉強会での討論の積み重ねによって、立場の違いを理解しあい、目標を共有し、互いに変わりながら活動していくという、創造的なプラットフォームとして会合の可能性が見出された。第二に、取り組みの期間と対象について、長期か短期か、全体的か部分的かで意見が分かれたが、長期の全体的なコンセプトづくりと、短期かつ部分的な実践を同時並行に進めていく方針が合意されていった。第三に、最初の協働事業をいかに行なうかという課題に対しては、ある企業の申し出と国からの補助金の獲得により、地域情報を発信するディスプレイを11の協力企業に置いて散策を促す社会実験が実行された。

本章の結びに代えて、都心商業・業務地区における多元的協働管理の実現に向けたポイントを三点ほど整理しておきたい。第一に、自治体職員の関与は、誘導というよりも公に開かれた議論の場を創出するというメリットのほうが大きい。第二に、企業とその就労者は、課題に対する解決策が制度化されない段階からスピーディに対応できる人的・資金的な資源へアクセスしやすく、地域管理に欠かせない。

3 こうした多元的協働管理の先行事例として、大手町・丸の内・有楽町地区（大丸有地区）、福岡市天神地区の「エリアマネジメント」がよく知られている。

第三に、長期目標の検討と短期的実践の並進によって、速度感の異なる多様な価値が入り込む余地が生まれてくる。

第七章 開かれた都市空間を創造する商店街活動—コミュニティの「結び手」としての商店街活動—

商店街活動がまちづくり活動と接近し、商店街が地域コミュニティを支える公益性を備えることで商店街としての生き残りをかける今、商店街活動は今まで以上に総合的なプランニングや他分野との協働が必要となってきた。この結果、商店街活動は「小さなまちづくり活動の連鎖」（第五章）と「エリアマネジメント」（第六章）モデルを結ぶようなものへ変わりつつある。本章のねらいは、第五～第六章のモデルを補完し基礎となるもう一つの実践モデルとして、オープンな都市空間を創造する「脱場所化」の担い手としての商店街活動の可能性を探ることである。

商店街振興策は、いかにも行政的な領域を区切った思考法で、対象商店街を空間的に切り出し、商店街の「存続」を一義的な問題とみなしがちである。既存の権力構造と空間構造を固定的な環境とみなした場合は、社会と空間が閉塞し、時間にしか開放の余地がないためかもしれない。

一方、活力ある商店街活動には、一点突破型の短期的実践、開放的実践組織、漸進的事業展開が共通しており、境界づけられた領域を総合的に管理するよりむしろ、事業テーマを絞ってネットワークを紡いでいく「脱場所化」のほうに長じている。商店街は地域コミュニティの「担い手」というより「結び手」といったほうが適切かもしれない。

それでもなお、行政が商店街の「存続」を支援しようとするならば、現在欠落している商圈の配置計画を広域的な都市計画が担うべきではないか。さらに、行政は誘導というより「エリアマネジメント」（第六章）への主体的参画が求められるのではないか。

終章

本研究の成果を今後の都市・地域のプランニングへどのように活かせるのか。「脱場所化と再場所化」の実践的なあり方を探ってきた第五～七章の事例のプロセスを総括すると、開放、対話、自治、協働⁴の連環とみることもできる。なかでも開放と対話が重要なプロセスとして浮かび上がってくる。今や制度疲労が著しい近代都市計画システムは、このような開放性とコミュニケーションを軽視してきた。

「再場所化」のプロセスに最も調和する計画体系は、対話型都市計画（Collaborative Planning）（Allmendinger, P. 2002）と思われる。対話型都市計画とは、対話的合理性を基層に据え、技術的にはワークショップ手法を多用するものである。

対話型都市計画の現場は、手足を使うこと、水平な関係、簡潔な表現、批判禁止、気安い雰囲気、アドホックな位置づけなどを特徴とする。そして限られた時空間において参加者が創造力を刺激しあい、創造的な結論を導くところが長所である。対話型都市計画が創造性に優れているのはなぜか。デヴィッド・ハーヴェイ（2005=2007）は空間の性質を、絶対的／相対的／関係の時空間と、経験された／概念化された／生きられた空間からなる二軸のマトリクスで捉え、これらの間の弁証法的運動をみようとする。これに照らし合わせれば、近代都市計画は「関係の時空間」と「生きられた空間」に立ち入る術をもたず、弁証法的運動の幅が狭い。これに対し、対話型都市計画は三×三の行列のすべての枠組みを駆使しようとする。ワークショップが有する身体性・協働性⁵は、「絶対的空間」の軸において、共有性・

4 林泰義（2005）が言う「目標イメージの開放」、「対話の水平なコミュニケーションから生まれる『まちづくりフィールド』」、「地域ガバナンス」、「協働の自治」から成る四層の処方箋を参考にした。

5 木下勇（2007）はワークショップの特徴を身体性、協働性、共有性、創造性、過程重視の五点に整理している。

創造性は、「関係的時空間」の軸において、さらに過程重視、気安い雰囲気、厳しい時間管理、柔軟な変更は「相対的時空間」の軸において、それぞれ「経験された／概念化された／生きられた空間」の間を往還しようとする。

対話型都市計画は、従来は近代都市計画制度の下位システムとして取り込まれてきたが、このような弁証法的運動の領野の広さ、つまり多彩な空間と時間を使いこなす幅の広さと豊かさはむしろ逆であり、小さいながらも近代都市計画システムを越えた包括的な仕組みと捉えられるのではないか。ただし、対話型都市計画が「再場所化」の一種である以上、前提として領域と参加者の囲い込みは避けられない。そこで閉じてしまわずに、次なる創造的な過程、つまり他のメンバーによる対話と領域編成がスタートできる機会を生み出し続けるために、「脱場所化」の徹底、たとえばお洒落で変化に敏感な広場のような空間の創出を忘れてはならないだろう。

[文献]

Allmendinger, Philip, 2002, *Planning theory*, Palgrave.

Harvey, D., 2005, *Spaces of neoliberalization: towards a theory of uneven geographical development*, Franz Steiner Verlag. (=2007, 本橋哲也訳『ネオリベラリズムとは何か』青土社.)

原広司, 1975, 「文化としての空間—空間概念論のためのノート・均質空間論(上・下)」『思想』岩波書店. 614: 1-20, 615: 23-38. (再録: [1987] 2007, 『空間<機能から様相へ>』岩波書店.)

林泰義, 2005, 「公共性を支える仕組みのデザイン」, 植田和弘・神野直彦・西村幸夫・間宮陽介編『都市の再生を考える 公共空間としての都市』岩波書店.

木下勇, 2007, 『ワークショップ—住民参加のまちづくりへの方法論』学芸出版社.

小島孜, 1999, 「創造的合意形成に向けての方法論的考察—芦屋西部地区復興まちづくりの中間総括」『日本建築学会計画系論文集』524: 327-32.

Lefebvre, H., 1974, *La production de l'espace*, Anthropos. (=2000, 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店.)

Luhmann, N., 1995, *Die Kunst der Gesellschaft*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (=2004, 馬場靖雄訳『社会の芸術』法政大学出版局.)

Soja, E. W., 1989, *Postmodern Geographies*, Verso. (=2003, 加藤政洋ほか訳『ポストモダン地理学』青土社.)

——, 1996, *Thirdspace*, Blackwell. (=2005, 加藤政洋訳『第三空間』青土社.)

Urry, J., 2000, *Sociology beyond Societies*, Routledge. (=2006, 吉原直樹監訳『社会を越える社会学』法政大学出版局.)

(2011年1月7日)

論文審査結果の要旨

本論文は、アンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』をテキストとして、近代における空間の「均質化と差異化」の過程を「脱場所化と再場所化」の過程としてとらえ返した上で、現段階における都市空間の再編／都市計画が包含する創建的な可能性を明らかにしたものである。論文は、序章、第一～七章、および終章、からなる。

まず序章では、テーマの開示とともに、その背後にひそむ著者の問題意識が明らかにされる。そして鍵概念である「脱場所化」がいわばネットワークがつながりあっていく過程であり、「再場所化」がネットワークの結節点としての「場所」を再構築していく過程であることが指摘される。この導入部を受けて、第一章では、近代の空間の「均質化と差異化」の過程が「脱場所化と再場所化」の基層をなしていることが、『空間の生産』の解説／いわゆる「空間的实践」、*「空間の表象」*、*「表象の空間」*の三元弁証法の解明を通して明らかにされる。次いで第二章では、上述の三元弁証法が宮城県志津川町（現、南三陸町）入谷地区の空間的編成に適用され、そこから合理的な空間秩序が生産される一方で、多様な「生きられた空間」が作りだされていく過程が浮き彫りにされる。続いて第三章では、「せんだいメディアテーク」をフィールドにして、『空間の生産』の現代的意義がさぐられる。そしてルフェーヴルのいう「具体的空間」が近代空間の「均質化と差異化」に対する代案としてあることが指摘される。第四章では、この「具体的空間」の分析枠組みの適否が現代都市空間の理解・設計・管理をめぐる詳しく論じられる。第五章では、山形県上山市中心市街地の「小さなまちづくり活動」を事例にして、資本の論理による「差異化」ではない、協働の論理による「再場所化」の可能性がさぐられる。さらに第六章では、仙台市の青葉通りにみられる「エリアマネジメント」の事例分析を通して、大都市都心ならではの多元的共同管理の可能性と課題が析出される。第七章では、今日みられる商店街活動が以上の「小さなまちづくり活動」と「エリアマネジメント」を結ぶモデルとしての役割を担っていることが指摘される。そして終章では、いわゆる対話型都市計画がまさに「再場所化」そのものであることが論じられる。

本論文は、1990年代以降、空間論的転回（spatial turn）を中心的に担ってきたルフェーヴルの『空間の生産』を導きの糸として、「脱場所化と再場所化」という斬新な概念を駆使して、現代日本の都市空間の再編の論理とそこに内在する多様な「生きられた空間」の可能性を複数の事例分析を介して浮き彫りにしたきわめて意欲的な作品である。そして都市空間論に新たな展開の契機をもたらすことに成功している。よって本論文提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。